

令和7年度 近畿大学 大学院商学研究科 博士後期課程
一般入学試験問題 【専門科目】 (2024.9.14 実施)
解答例・出題意図

科目名：運動行動・健康プロモーション特殊研究

問題：

運動・スポーツにおける技能の習得（または習熟）や非認知能力を高める上で有効となる心理学的な理論や変数について論じなさい。

運動・スポーツにおける技能の習得（または習熟）や非認知能力を高める上で有効となる心理学的な理論や変数は数多く存在する。たとえば、自己効力感理論、自己決定理論、トランスセオレティカルモデル、自己調整学習理論、エコロジカルモデル等が挙げられる。自己効力感理論は、アルバート・バンデューラ博士により開発された理論である。本理論では困難な状況でも「自分ならできる」「自分なら乗り越えられるはず」と考え、諦めずに状況を打破しようとする。自己効力感が高い場合、失敗から学び、次に生かそうとする力も高いため「次はこういう行動をすればうまくいくだろう」と考え、再びチャレンジすることができる。よって、常に向上心を高く持ち、モチベーションの高い状態を保ち続けることができる。運動・スポーツでは失敗や挫折はくり返し生じるため、指導者やコーチは自己効力感を踏まえ、生徒や選手を指導することは極めて有用である。

出題意図：運動やスポーツでの技能習得や非認知的能力の向上に関する心理的概念を正しく理解し、的確に論じられるかどうか。